地質相談所でのこの1年

岸　本　文　男（地質相談所）
Fumio KISHIMOTO

早かったか　遅かったかは別にして　地質相談所に勤務してから1年が経った．　辞令は鉱床部鉱物資源課との併任であるが　中身は専任である．　組織上は所長直属となっているが　実際には所長に代って次長から指示を受け　私の報告や意見は次長に述べている．　私の仕事は技術指導・相談業務に励むということである．　でも　合間をみて書きたい原稿を書くことは　むしろ積極的に勧められている．　鉱物資源課は働きやすい所だが　地質相談所でも　勤務しながら今までのペースは維持できるだろうと　呑気に構えていた．　それなのにそのつもりの1年間が　実をいえばアレヨアレヨと過ぎてしまった．

「どうして書けなかったのか」　という反省もある．「あれやこれやと　結構忙しかったから」　という弁解もある．　ともあれこういった1年間の中で印象深かった　諸々の事から少し選んで語ろうと思う．　新米の弁である．

初仕事

昭和60年4月1日　この日に辞令を受けたのであるが　外から電話1本かかってくるでなし　引き継ぎも簡単だったし　専ら挨拶まわりと荷物の片付けで一日が過ぎた．　一日に一人もお客さん（指導相談の依頼者）が無いとなると　時間の余裕はタップリ有るんだと喜ぶよりも　この先どうなるのかという心配が先に立ってくる．

ところがである．　翌2日　地質標本館長から「中学生が一人　尋ねて行くからよろしく」との電話．　俄然私は張切った．　これこそ　正真正銘の初仕事．

やがて　標本館長さんと一緒に入ってきた一人の少年眼鏡をかけている．　聞けば　中学の2年生になりたてのホヤホヤ．　はるばると常磐線を使ってひとり地質調査所までやって来たという．　来てくれただけでも感激である．　彼はノートを取り出し　鉛筆を手にユックリと質問する．

「栃木県の今市市にある鉱山の名前と場所を教えて下さい」

「何の鉱山？　金？　銅？　それとも鉱山の全部？　それとも何だろう？」

「金山と銅山です」

私は　日本鉱産誌の巻Ⅰ-aと巻Ⅰ-bを使って答える．　少年はそれを一つ一つノートに書込もうとしている．　現在の今市市は一昔前の今市町に較べると　それこそ較べようもないほど広くなった．　小規模なものばかりとはいえ　金山と銅山の数は相当なものである．しかも日本鉱産誌に書かれている地名は　今の地名に直さなくては通用しない．　少年は丁寧に書き取ろうとする．　見るに見かねて　私は言った．

「どうだろう．　この本のここととここのところをコピーしたら．　それに　これに書いてある地名と今の地名の対照表もコピーしたら良いと思うけど」

「あのー」　と言って　彼は何となく遠慮している感じ．

「良いんだよ．良いんだよ」
「はい」

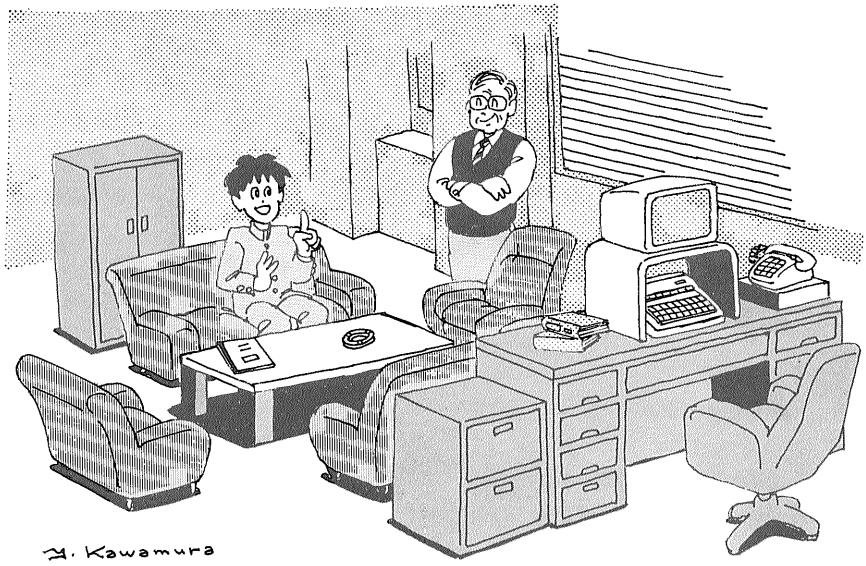
これで通じた．　彼は費用を心配したのだ．　この頃の中学生は小遣いをどれくらい貰っているのだろう．

「さあ　いっしょにおいで．　コピーしよう」

少年は地質図の利用方法と八ヶ岳東方の地質についても質問し　最後に地質調査所発行の1／5万地質図の入手方法について尋ねた．　それが欲しいという．　何とかしてあげたいとは思ったけれど　地質調査所で直接販売できるようにはなっていないし　ましてや地質相談所に来られた依頼者に無料でプレゼントできる制度はない．

「すぐ手に入らないと　どうしても駄目なの？」

と問いかけながら　「念のために」ということで　地学文献センターの場所と電話番号をノートに控えてもらっ



た.

「こんなに詳しく教えてもらったのは初めてです.
どうも有難うございました」

こんなに嬉しい挨拶を受けたのは　おじさんも初めて.
それなのに　おじさんは1枚の地質図を君にプレゼントすることが出来ないなんて.　ごめんなさい.　この思いは　それ以来ずっと消えることなく続いている.

今　所内の担当責任者と関係者の間で　この様な場合に対応できる道が探されつつある.　熱いまなざしで私はその吉報を待っている次第である.

地質相談所設置の根拠

どこの官庁　どんな国立研究所でも　またその中の一部門であっても　それが存在するには法律　法令の定めによって裏付けられていなくてはならない.　地質調査所はもちろんのこと　地質相談所もその例外ではない.

地質調査所の設置については　「工業技術院設置法」(昭和58年法律第78号) の第4条の

「工業技術院に　部及び試験研究所を置く」

に始まり　「工業技術院設置法施行令」(昭和59年政令第186号) の「第一条の四」の

「工業技術院に置かれる試験研究所は　次のとおりとする.
……
地質調査所
……
……」

で文字になり　同じく第8条の

「地質調査所は　地質及び地下資源の調査並びにこれに関する研究　技術指導その他これらに付帯する業務を行う」

によって土台が描かれ　さらに地質調査所の中身 (組織) が　「工業技術院組織規程」(昭和60年省令第24号)　によって規定されている中にやっと地質相談所が顔を出す.
その第65条に

「地質調査所に次長　企画室　総務部　地質部　海洋地質部　環境地質部　地殻熱部　鉱床部　燃料部　物理探査部　技術部　海外地質調査協力室　資料室及び地質相談所を置く」

そして　同じく第73条に

「地質相談所においては　地質および地下資源の調査の指導に関する業務をつかさどる」

とあって　これこそが地質相談所が存在し　仕事をしている根拠なのである.　しかし　この第73条が定めた内容はひどく現実離れしてきている.　現在　地質相談所がつかさどっている業務は　地質・地質作用・地質現象の全般であり　地質科学に係わる全てなのである.　このような変化は　つめて言えば　国民の皆さんの要求の変化に反応した結果であり　とても良いことだと思われる.

なお　昨年七月に地質情報解析室が新設されたが　これは　「工業技術院地質調査所組織細則」(昭和60年地調第738号)　の第37条の3と同3の2で定められている.
この第37条の次の条　第38条には

「室　地質相談所　課等に係を置くことができる」とある．　実際には　地質相談所に独立した係は置かれてない．　国立研究所の慢性的人手不足の中で　地質調査所も例外でなく　地質相談所の事務一般は総務部業務課広報係が兼務している．　この広報係とは　本誌の編集で知られている部門．　少しは興味が持たれるような記事を書いて　日頃の労苦に報いたいと思いつつも果たせず　誠に申し訳ない次第である．

さて　また一年の中の印象に戻ろう．

薬石は高いほど良く効くか？

これは　ある自治体から検査の依頼があった「健康器」の話である．

地質と健康器にどんな係わり合いがあるのか　と頭をかしげる人もあるだろうが　持込まれた「健康器」は平べったい　四角な金属製（ステンレス　スティールに摸して磨いてある）の容器に小石を詰込んだものだった．

依頼者は事の経過を詳しく説明する．　そして尋ねる．

「これは　効きめのあるものでしょうか？」

この質問に直接答えることはできない．　薬の効果とか治療の効果とかに医事や薬事の専門家でない者が公言することは　薬事法に触れる．　容器の中の小石はすべてありふれた花崗岩で　販売会社の「しおり」に書かれている「大量のラドンを発生するので　風呂に入れてユックリ入浴すれば　糖尿病　腎臓病　肝臓病……に卓効がある」とは考えられない代物であるが　効くにせよ　効かないにせよ　とにかく「しおり」の記述が嘘か真か科学的に立証すればよい．　それには　ラドンの発生量を測定する必要がある．

環境地質部地震化学課のその分野の専門家にお願いして　そのラドン発生量を測定して戴いた．　その測定には　少なくとも5日を要する．　そして結果は　「発生ラドン量は花崗岩での平均値を越えず　特殊な岩石にあらず」であった．

「住民の方々からこの種の販売品に疑問がたくさん寄せられて　対応を急いでいるのです．　これを買った人　いや　買わされた人と言うべきかもしれませんが　少なくないのです」

聞けば　一体がなんと20万円とのこと．　給料を考えると　公務員はまずひっかかる恐れなしだろうが．

「高いから　この種の詐欺的な商品を買う人もいるわけです」

一般に　「高い物ほど良い物だ」　という傾向があることは認めるが　そのような人の気持を利用してあくどい商売をする人間は許せない．　しかし　そのような商人はあとを断たないだろうと思う．　要は　買わないことなのだが．

依頼者とこの種の「インチキ商品」の見分け方について検討した．　その結果　「しおり」に会社名だけが印刷され　所や番地　それに電話番号も責任者の姓名も印刷されていないこと　価格が高いこと　人々にあまり知られていない　安価な物を材料に使っていることが特徴ということになった．

追跡調査をしていないので　その後　この自治体がどのような対応をされたか　全くわからない．　広報手段を使って住民に注意を繰り返し呼びかけられたのか？　それとも　それとは違う方法をとられたのか？　是非とも知りたいとは思いながら　「でしゃばる」のは遠慮している．

慾それともロマン

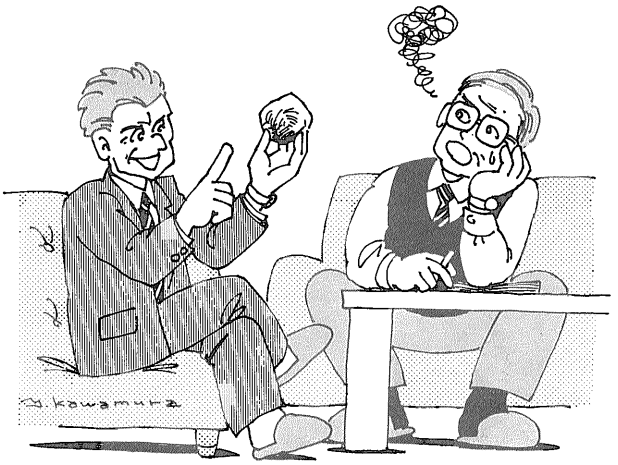
いつの世でも　「一鉱山（ひとやま）」当てたいと　鉱石探しに夢中になる人は少なくないが　その事自体に口をはさむつもりはない．　時には　鉱石の露頭を求め転石をルーペで観察する年輩者に男のロマンを感じることだってある．

しかしである．　鉱石には及びもつかない石塊を鉱石だと信じ　鉱体とは名ばかりの鉱石の小さな集合体を日本屈指の大鉱体だと思いこんでいる人に会ったら　地質の専門家である貴方はその人にどのような話をされるだろうか？　もちろん　その人は正気である．

それは　私が地質相談所に勤務し始めてから　間なしのことであった．　電話の主は中年の男性．　それは「今から伺いたい．　ウランの鉱石をもって行くので　調べて欲しい」という内容だった．　彼は自らの約束の時間に一時間くらい遅れて到着した．　田中角栄式の挨拶をしたのには驚いたが　そのことよりもウラン鉱石の方が気になるので　「どんな鉱石ですか？」　と催促したわけ．　おかげで　初対面の丁重なやりとりもなければ名刺の交換もなし．　変な挨拶をされて　私はムッと来ていたかもしれない．

あらかじめ用意していたシンチレーション　カウンターで放射能を測定したが　その値はバックグラウンドとどれほどの違いもなかった．

私「これはラウン鉱石じゃありませんよ」
彼「いや　これはX博物館で日本では珍しい　高品位のウラン鉱だと言われました」



私「これが　ですか？」
彼「それじゃないけど　それと同じ様な鉱石です」
私「X博物館で見てもらった鉱石はどれです？」
彼「ここには持って来ていません」
「眉が唾で濡れて行く」気分.

私「X博物館で素晴らしいウラン鉱石と鑑定してもらって　また何故ここに来られたのですか？」
彼「鉱石の調査をしてもらうために」
私「これはウラン鉱石ではありません.　だから調査の対象にはなりませんよ」
彼「分析はしてもらえますか？」
私「この試料でウランを分析しても無駄ですよ」
彼「X博物館では珍しく優秀な鉱石だと言ったのですから」
私「貴方がその鉱石を持って行って　見てもらったのですね？」
彼「私も行ったことがあります」
私「他に誰か同行されたのですね？」
彼「元大学の先生です」
私「X博物館での話はその先生から聞いた話でしょう？」
彼「先生からも聞いたけど　私も行ったんです」

変なことになってきた.　これでは　警官と犯人　そうでなければ　法廷の証人訊問だ.　この日は　鉱床部のウラン鉱床の専門家から　これぞウランの鉱石といえる試料を目の前でシンチレーション　カウンターにかけていただき　音声に変えて比較し　やっと鉱石でないと納得してもらうことができた.　結局その日は　彼の姓名を知らずじまいで終ってしまった.　だが　問題は終っていなかった.

それから2か月ほどして　彼から電話があった.　いよいよ　鉱山を開くことになったので　もっと突っ込んだ話を聞きたい　というのである.　何を血迷ったのかむちゃな　これが私の心の声であった.

「ボーリングをすることになりました」

開口一番　彼の宣言である.　我また何おか言わんやの心境で　じっと顔を見たのだが　彼は落ち着きはらっていた.

「いい鉱石がみつかったのですか？」
「そうです.　これです.　キャシテライトとモリブデナイト　それにタングステンもあるようです」
ルーペを通して見る鉱石（？）にキャシテライト（錫石）の姿もモリブデナイト（輝水鉛鉱）の姿もない.　一個の小さな鉄マンガン重石らしい鉱物をみつけただけ.

「この鉱石が地下に少なくとも200mは続いています」
「もう　ボーリングで確認されたわけですか？」
「この山に詳しい人が太鼓判をおしてくれました」
「ほう　地質の専門家に調査してもらわれたのですね.　何処の何という方ですか？」
「いや　昔鉱山で働いたことがある人で　私が信頼してる人です」

これはもう　メチャクチャもいいところ.　さて　どこから目を覚まして戴こうか.　彼の言う「元大学教授のI先生」だって　地質の分野では見当たらない.　彼が地質相談所に現れたのが午前10時ごろ　そして帰って行

かれたのが午後6時を過ぎてのこと．　その間　昼の食事どきを除いた7時間ばかりを費やして　<専門家に地質鉱床調査を依頼すること>　そして<その調査によって出された結論に 100%従うこと>をしっかりと約束してもらい　地質コンサルタント会社をいくつか紹介した．　話が終るころには　「変な挨拶のことも忘れ　親しみを感じる」までになっていた．

年が改まって　某地質コンサルタント会社から彼の山の調査話が伝わってきた．　正直に言って　私はホッとしたのである．

彼は男のロマンを追っている人物なのか　それとも慾に取りつかれただけの人物なのか……

男のロマンを追っている人がすべて心豊かとは言いきれないし　慾に取りつかれた人がすべて世に害を与えるだけとは限るまい．　しかし　私は思うのである．　ロマンを追おうとも　慾に駆られようとも　神のお告や願望よりも　科学的な根拠を手にして欲しいと．

地質相談所への道案内

筑波研究学園都市の中に住んでいる人でさえ　地質相談所を捜して他の研究所に迷いこまれることもある．ましてや　東京や水戸などから初めて来られた人にとって筑波研究学園都市の何処の研究所も　不便で　わかりにくい所のようである．

地質相談所は　地質調査所の1階　正面玄関の横のエレベーターのまた横の110号室に置かれている．　110番だから覚えやすいと思いたいが　どうであろうか．　ただし　110番は部屋の番号であって　電話番号ではない．　エレベーターの横　地質相談所の入り口の壁に「地質相談所」の比較的見やすい看板が張り付けてあり　目印にはなってくれている．

さて　本体の地質調査所への道順であるが　最寄りの国鉄の駅は常磐線の荒川沖駅で　ここで降りたらバスに乗り換えて並木2丁目という停留所で下車するのが標準的コースといえる．　荒川沖駅から　これとは別のコースもあるが　それはバスを降りてからがややこしい．

並木2丁目のバス停留所を降りたら30mばかりバックして右に入り　正面にある3階建の手前に立って90度右を見れば　見た正面に8階建の建物がそそりたっている．　これが地質調査所の本館であり　その建物に向かって真っ直ぐ進めば　正面玄関に行き当たることになる．

国鉄常磐線の土浦駅からバスで並木京成ストア前に至り　それから歩くという方法もあるが　地質相談所まで15分ほどかかるので　これは健脚向きコース（?）かもしれない．

乗用車で来られる方には　東大通りの並木2丁目の交差点から入られ　正面玄関前の来客用駐車場を利用されることをお勧めしたい．

地質相談は何も来所されなくても　電話でことたりる場合が非常に多い．　その電話番号は　0298-54-3540である．　直通だから　気軽にかけて戴きたい．　質問や相談が地質相談所にふさわしいかどうかに迷うよりも直ぐに聞いてくだされば　お話できることはお話するし　できないことはどこに聞かれればよいかをお伝えできる　と言うわけである．　手紙で質問や相談を受けるという場面は不思議と稀なことなのだが　手紙という手段はもっと活用されればよいと思う．　その場合の宛名は　「〒305　茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3　地質調査所　地質相談所」　である．

地質相談所が開かれている時間は　月曜日から金曜日までが午前8時30分から午後5時まで　土曜日が同じく午前8時30分から午後0時30分までである．　ただし第一土曜と第三土曜は前もってお電話がない限りお休みである．　お電話があって　「土曜日に訪ねる」と申されるなら　必ず出勤してお待ちする．　今までもそうしてきたのだから．

なお　電話はもちろんのこと　地質相談所まで来られての質問や相談　指導依頼でも　すべて無料である．いつだったか　分厚い財布を出されて　「相談料はいかほどでしょうか」　と問われ　目を白黒させられたことがあった．　依頼によって現地に調査に行く　試料の特別な分析を行うなど　とくに手がかかることだけは有料であるが　それも地質調査所が定めた会議や定められた責任者の承認が得られなくては実施できないのである．

室内作業の場合には　たとえば地球化学標準試料のように特に無料のこともあるので　地質相談所に問い合せられれば　おわかり願えるはずである．　来所され　質問そして応答の結果　必要があるとなって　その場でコピーを地学文献センターという所に頼まれる時以外　一円も必要はないのである（その場合でも後払いという方法もある）．

依頼の内容はまさにさまざまである．　次の話は　最近増えてきた問題の一つの例である．

家が傾く

地質相談所の来訪者には　あらかじめ電話をかけて日にちと時間を確定してから来られる人と　そうしないで不意に来られる人の二つのタイプがあるようだ．　とりたてて　どちらがどうということではないが　敢て言わせて貰えれば　依頼の内容が前もってハッキリとわかっている方が準備の時間に余裕があるだけ　当方にとって

は都合がよい．　これは　6月のある日　突然に来訪された一人の建築・販売業者の話である．

用件は　ある建設会社が社有地を宅地に改造した上　そこに建て売り住宅団地を建築し　その販売権をこの建築・販売業者に譲った．そして　この住宅団地は売りにだされ　お客さん達がやってきた．　お客さん達は　次々に質問する．　その中で一番多いのが　「絶対に傾かないでしょうね」であるという．

「本当にここの住宅は傾くでしょうか？　もし予防ができるなら　方法を教えてください」

正直に言って　一瞬の当惑．　予防とは？　方法とは？　しかし　何をさておいても位置を知らねばならぬ．　私はまづ　備え付けの1／5万の地形図を広げて　彼に問題の住宅団地の位置を示してもらう．　彼の持つ鉛筆が図上をさまよった．　この備え付けの地形図は幸か不幸か　20年以上も昔のものだった．　現在と比較すべしと　別の私がこの私に命令する．

私は彼に該当する位置を正確に押さえてくれるよう頼んで　地図保管室まで最新の地形図を入手しに行った．帰ってみると　鉛筆で描かれた小さな丸は沼にかかっていた．　そして　その沼の周辺は湿地の記号だらけ．念の為に　最新の1/2.5万の地形図で位置を確かめた．それを　彼が描いた1／5万の地形図上の位置と照らし合せる．

昔　そこは比較的大きな沼であったことがわかった．しかし埋立ててから年月を経ているなら　希望はもてないか？　その地の役場に電話をかけて教えてもらった．埋立ててからまだそんなに経過していなかった．

「このままなら　傾きますね」

彼の方から　力のない声が私の耳に．　なんとも　気の毒なことであるが

「そうですね」

としか　言いようもない．　この素直な人が　何故にそんな所の住宅を売らなくてはならなくなったのか　事情はポツリポツリと語ってくれたけれど　その話は私の勉強にはなったが　地盤沈下の対策にはつながらない．対策については　建築研究所など官民4機関のそれぞれ何処に聞いたらよいか　そしてその場所と電話番号をお話して　あとは雑談ということにした．

私がこの筑波研究学園都市に引っ越してくる前に住んでいた町でも　実は家がそれこそ軒並みに傾くという騒動が起こった．　それは　町の中央を流れる小さな川が掘り下げられ　垂直4mもの護岸工事が完成してから始まった．　要するに　頑丈な護岸工事によって地下水位が上がったために起こった家屋の沈下と思われるが　区の調査結果にはまだ接していない．　一雨降れば　めったやたらに「もぐら」の穴から水が湧き出るさまは　それまでには見ることができなかった珍現象で　川沿いに住む人々の気持を苛立たせるのに役立つだけであった．

傾いた家々は　今　盛んに建て直されている（これがすべて自費）．　太いパイルがたくさん打込まれ（水ようかんでも切るようにスッスッとパイルは地中に入って行くそうである）　その上に家が乗る．　区役所の建築課では　もう二度と傾くことはないと　太鼓判を押している……といった雑談を少しして　相談を終えた．

どのようにされたか　その後のことは知らないが「マイホームと地盤地質」のつながりを　建てる人も売る人も求める人も　ゆめゆめ忘れ給うことがないよう望んでやまない．

お婆ちゃんは78歳

この話は先ず電話から始まる．　それは甘い声だった．若い人ではないことはすぐにわかったが　地質相談所に御婦人から電話があるのは珍しい．　質問の内容は

「インカ帝国が好きで　勉強しているのですが　その遺跡から鉄器や鉄製品が出土しないそうですね．　でも　鉄はあんなに暑い所ではすぐ錆びて　ぼろぼろになるのではありませんか？　そして　粉になって無くなってしまうのではありませんか？」

ということに尽きた．

素直な　しかも科学するこの御婦人のお年を聞くと78歳という答が返って来た．　初めは　88歳と聞き違え　ひどく驚いた．　二度目の電話で　78歳であることがわかった．　それでも　やはり驚きであるには違いがない．　関東山地前縁の農村から　村の移動図書館で手に入れた知識に従って　お婆ちゃんは電話のダイヤルを回したというわけ．

何処に聞いたら教えてくれるか　考えたお婆ちゃんは先ずは筑波大学へ．　それから　紹介されて地質相談所へ．

インカ帝国の遺跡の大まかな分布を語って　涼しい山地にある遺跡の話をしたり　同じ時代のベトナムの遺跡で鉄器が出土したとか　鉄が激しく酸化するのには水だけじゃなくて　塩分があるとよいとか　鉄がぼろぼろになって　そして粉になっても　水に流されない限り

鉄器が副葬されていたかどうかは調べればわかるとか説明しているうちに　お婆ちゃんの話がだんだんと文化人類学に入っていった．　文化人類学という言葉までとびだした．　手もとに相応の資料はない．

お婆ちゃんの声がはずむ．　ヤバイと思った．　私の文化人類学は　ただ一篇の新書判の知識でしかない．それも　うろ覚えである．　でも　考えた．　お婆ちゃんは　今　話を楽しんでいる．　今度は私が聞き手になればいい．

後になってお婆ちゃんが電話代に困るのではないかと心配になった．　それくらい　お互いによくしゃべった．　その日　私は5時になるやいなや　真っ直ぐに官舎に帰った．　そして　着くとすぐに受話器をとり　田舎に住む86歳の母に電話をかけた．　家内が日頃にない私の振る舞いに驚いている様子を背中に感じながら．いつもは　午後9時になってから　それも時々．　母は時ならぬ電話に　57歳のこの私の身に何か起こったのではないかと心配してくれた．　何歳になっても母親にとっては子供なのだ．　電話をきって　家内の方を振り返ったら　優しさ一杯の目をして私を見ていた．

今でも　ふっと　あのお婆ちゃんはどうしてるかななんて思うことがある．

留守番電話

すでにお判りになったように　地質相談所は一人勤務である．　広い（?）部屋に一人で勤務することは一見のんきに見えるらしい．　「寂しくないか？」　と聞く人もある．　どちらも当たっていないこともない．　一人勤務の良い点は　どのように部屋を整えるかとか　戸棚を配置するかとか　予算をどのように実行するかとかが自分の決心だけでやれるということにある．　もちろんそれには弁解無用　100％の責任がつきまとうのであるが．

その反面　困ることもある．　端的に言えば　部屋を空けることは業務上まずいのである．　たとえトイレに行った短い間でも　相談の電話はかかってくるし　風邪をひいて寝込んでしまったら　地質相談所はその間完全に閉店である．　近所に同業者がいないどころか　日本中を探してもわが地質相談所に相当する機関は無いのだから　余計に困る．

そこで　兼務者を求めて次長に頼みこんだ．　最初の答えは余韻のあるものだったのだが　途中で調子が変りとどのつまりが留守番電話になった．

この電話　正式には「留守番コーダー」と呼ばれ　なかなか良くできている．　部屋を空けていても　前もってテープに吹込んだ声が電話の主に答えてくれるのはもちろんのこと　たとえば　かかってきた電話の内容も官舎から聞き取ることができる．　そのような秘密兵器がついているのである．

テープに吹込んだメッセージは　次のように語る．

「はい．　地質相談所です．　ただいま席を空けておりますので　御用件は留守番電話が承ります．　メロディーがなって　ピーッという音が聞こえましたら　お名前と電話番号　ご用件をお話し下さい．　約60秒間録音できます．　折り返しお電話をさしあげます．　ではご遠慮なく　どうぞ」

この一年間で　留守番電話が受けてくれた　もっとも遠くからの電話と言えば　熊本県のある大学からのものであろう．　それにはこちらから電話をかけて　期待にこたえることができた．　またトイレに行って　帰ってきてみると　赤ランプが点灯して電話がかかってきたことを教えてくれた例のうち　相談業務だったものは6件

しかないが（6件もあったと言うべきかもしれない）「留守番電話があって良かったなー」と胸をなで下ろしたこともあったのである．

この留守番電話が設置された当時は　正面玄関の電話を使って　受信状態をよく試した（楽しんだ？）ものである．　昼休みなど外から帰って　点灯した赤ランプが目に入ると　ご満悦だったものである．　しかしそのうちに　赤ランプが　「部屋にじっとしていろ！」とか「もっと早く出勤しろ！」とか　「昼休みにそんなに度々釣道具屋にいくな！」と言っているような感じになってきた．　今では　この留守番電話が私の監視役を果している．

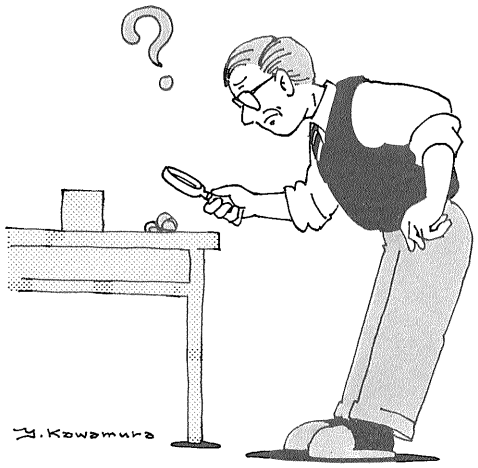
この電話でのメッセージであるが　途中で一度変えたことがある．　それはこうだった．

「はい．　こちらは地質相談所です．　ただいま席を空けておりますが　○○時ごろには戻りますので　申し訳ございませんが　お電話をおかけ直し下さい」

気持は判って戴けると思うけれども　このメッセージは4日と保たなかった．　「感じが悪い」という評判をいただいたからである．　私自身も一度だけ約束の「○○時ごろ」に遅れ　気にしていたので　アッサリと元に戻した．

アッサリと元に戻したところまではよかったのであろうが　時々おかしなことが起こり始めた．　電話がかかってきて　すぐに受話器をとる．　「はい．　地質相談所です」と　先ずは名乗りをあげる．　ちゃんと私が名乗っているのに　「ガチャン」　電話の主は名乗りもしないで切ってしまう．　「なんだ．　間違い電話か」．　こんなことが何回かあったが　「間違い電話が多いな」くらいにしか思わなかった．

それでも　原因のわかる日がやってきた．　その日



電話のベルが鳴り　私はいつものように名乗った．　たまたま　「どちら様でしょう？」　を付け加えて．

「居たの？」　という意外な言葉に面食らう．

「どうして？」

「留守番電話かと思った」

声を変えなくてはだめだ．　私の声では　居るのに電話を切られてしまう．　家内に吹込みを頼んだら　簡単に一蹴されてしまった．　そこにもってきて　所内のある会議で　こんな経過を知るはずのない人から

「相談所の留守番電話を女の人の声に変えたらどうでしょう」

との提案があった．　その人の所で働いているアルバイトの若い娘さんに頼んだら　とも勧められた．　この提案で事を急ぐ気になり　結局は鉱床部の若いママさんに吹込んでもらった．　以来　無言の「ガチャン」はなくなった．

皆さん　熟年の男性の声が電話に出たら　さあ　質問でも相談でもどうぞ．

若い　おおらかな女性の声だったら　お名前と貴方の電話番号　そして御用件をお話し下さい．

おわりに

これで地質相談所での1年間を語ったことにはなりそうもないが　またの機会があることを願いながら　ここでペンを置くこととしたい．

例話を述べるに当たって　営業の妨害やプライバシーの侵害をしないよう　プロテクトがかけてある．　でもこの世には頭のいい人がたくさんいる．　システムディスクの厳重なプロテクトでさえ　軽々とはずしてみせる人もあると聞くほどに．　どうか　この小文のプロテクトははずさないよう　お願いしたい．

地質相談所の仕事は「何でも屋」であるが．　難問に行き当たって該当する分野の専門家に担当していただく場面が少なくない．　それは　「正確」さを重視してのことである．「正確」「迅速」「丁寧」「親切」をモットーとして　その日々の実行を期して　今日も地質相談所は貴方の来訪　電話やお手紙をお待ちしている．

このような地質相談所が広く人々に利用され　人々に役立つことを希望し　その故に筆者はこの一文を読んで下さったことに心からお礼を申上げたい．　地質相談所の仕事は　先ず存在を知って貰うことに始まる　と思っているので．　なお，挿画を書いて下さった総務部河村幸男氏にこの場を借りて厚くお礼申し上げる次第である．

（おわり）